

奪取られマソの
相チンマスター

DOJIN

R18

成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

めすとらだむす

カルデアの静かな一室、マスターである俺は、緊張で心臓がバクバクしていた。

目の前には、マシユ・キリエライトが控えめに座っている。

彼女の髪がかった髪が柔らかく揺れ、無防備な姿が、いつもより近く感じられた。

「先輩…本当に、いいんですか？」

「私、初めてなので…」

マシユの声は少し震えていたけど、信頼と愛情がこもっていて、俺の決意を後押しした。

「うん、マシユ。俺も初めてだけど…」

君とだから、大丈夫だよ」

そう言っって、俺たちはぎこちなく

抱き合い、服を脱ぎ始めた。

マシユの白い肌が露わになるたび、

俺の緊張は高まる一方だった。

いよいよその瞬間、俺がズボンを下ろすと、

マシユの視線が俺の下半身に注がれた。

「え…先輩、これ…？小さ…」
彼女の声に驚きが混じっていた。

俺の粗チン——正直、自分でも小さいことは
自覚してたけど、マシユの反応は予想以上に
ストレートだった。
マシユは慌てて手を振った。

くちゅ…

にゅ…

「ごうごめんなさい！そんなつもりじゃ…！」
気を取り直そうと、マシユが優しく
微笑んで手を伸ばしてきた。

「先輩、…気持ちよくなってももらえたら、嬉しいです」
彼女の細い指が俺に触れた瞬間、電気が走ったみたいになびクツとなってしまうた。
マシユの手は柔らかくぎこちないながらも丁寧で、俺はすぐに限界を迎えた。



「マシユ、待って…もう…!」
数回動かされただけで、俺は我慢できずに射精してしまった。

「え、せ、先輩…? もう…?」

マシユが目を丸くして、ちょっと笑いを
堪えてるのがわかった。恥ずかしさで
死にそうだったけど、彼女は優しく
ティッシュで拭いてくれた。
「…ごめん、マシユ。もう一回、
ちゃんとしてよう」

俺は氣を取り直して、マシユを
ベッドに横にさせた。彼女は頷いて、
恥ずかしそうに足を開いた。
いざ挿入しようとしたけど…
正直、俺のサイズじゃ、マシユは
感じてくれるかどうか…



くちゅっ...

くちゅっ...

「ん...先輩、えっと...入ってますか?」

マシユが少し困惑した声で聞いてくる。

彼女の表情を見ると、明らかに感じてないのがバレバレだった。

それでもマシユは、俺を傷つけないように気を使ってくれた。

「あ、んっ...せ、先輩、気持ちいい...ですっ」
彼女の喘ぎ声は、わざとらしくかった。

優しさゆえの嘘だとわかってるけど、
なんかそれが逆に興奮してしまった。

「マシユ、ううイっ...」

くちゅ...くちゅ...

Over \$20

そう言った瞬間、俺はまたすぐに限界がきて、そのまま射精してしまった。

「せ、先輩...もう、イっちゃいました...?」

「マシユ、ごめん...全然ダメだったな」

「そんなことないです、先輩！私、こうやって一緒にいられるだけで...本当に幸せですから」



あの日から俺はモヤモヤが止まらなかつた。
マシユとの初めての夜、彼女は優しく
笑ってくれたけど、あの喘喘きが頭から
離れない。

本当に満足してくれてるのか？

俺の粗チンじゃ、彼女を幸せにできないん
じゃないか？ そんな思いがぐるぐるして、
とうとうとんでもない考えにたどり着いた。

「マシユ…ちよつと、相談があるんだけど」

カルデアの自室で、俺はマシユを前にして
口を開いた。彼女はいつものように穏やか
な笑顔で

「はい、先輩。なんですか？」と答えた。

「その…俺、粗チンだから、マッシュが
本当に満足してるのかわからなくて…。
だから、ほかの、えっと…デカい人と試して
みて、ホントの気持ちを知りたいんだ」
言葉を選びながら、俺は顔を真っ赤にして
言った。

マッシュは一瞬、目を丸くして固まった。
「せ、先輩！？ そんな…私、先輩だけで
十分なのに…！」



彼女の声は動揺で震えてたけど、俺が必死に頼むと、彼女は目を伏せて小さく頷いた。

「…わかりました。先輩がそこまで言うなら…私、試してみます。」

でも、先輩、私の気持ちは変わりませんから」マシユの優しさに胸が締め付けられたけど、俺は覚悟を決めた。



相手は、カルデアの職員の一人で、噂で「デカイ」と有名な男、俺が事情を話すと、笑いながら了承してくれた。

その夜、カルデアの空き部屋で、

俺は息を潜めて見守ることにした。

マシユは緊張した顔で職員の前そばに立っていた。

えっと…

よろしくお願ひします。



マッシュがぎこちなく挨拶した瞬間、
俺の心臓がドクンと跳ねた。
彼女の白い肌が露わになり、
職員の手がマッシュの胸に触れる。

マッシュは「んっ…」と小さく声を漏らし、
俺はもう目が離せなくなった。

むにゅーん

むにゅーん

職員がズボンを下ろすと、噂通りの
デカチンが現れて、マシユが「ひっ……！」と
小さく驚いた。俺の粗チンとは
比べものにならないサイズだ。いっ

職員はコンドームを手慣れた様子で
装着し……

挿入の瞬間、マシユの声が一変した。
「あっ……んっ！ あ、すご……！」

普段の控えめなマシユからは想像できない、
切なげで甘い喘ぎ声。彼女の体が動きに
合わせて揺れるたび、

「あっ、あんっ！や、深……」どと声が漏れる。

俺はただ見てるだけで我慢汁が
溢れ出してた。

マシユがこんなに感じてるとは、
初めて見た。俺じゃ絶対に出せない声だ。

「せ、先輩……！」「ごめんなさい……でも、んっ！
これ、すごく……！」

「せ、先輩……！ごめんなさい……でも、んっ！
これ、すごくて……！」

マシユが必死に俺に訴えるけど、
すぐにデカチンピストンの動きで
「ああっ！」とまた喘ぎに戻ってしまう。

彼女の顔は赤く、目は潤んで、
完全に快感に溺れてる。

その姿に、俺の粗チンは触っても
いないのにビクビクしていた。

マシユが「やっただめっ、だー！」って叫んだ
瞬間、職員がさらに激しく動いて、
マシユが「んああっ！」と絶頂を迎えた。

その声と表情を見ただけで、
俺は我慢できずに射精してしまった。



「せ、先輩……！ごめんなさい……でも、んっ！
これ、すごくて……！」
マシユが必死に俺に訴えるけど、
すぐにデカチンピストンの動きで
「ああっ！」とまた喘ぎに戻ってしまう。

俺の粗チンは触っても
いないのにビクビクしていた。

職員がさらに激しく動いて、

マシユが「んああっ……！」と絶頂を迎えた。

その声と表情を見ただけで、

俺は我慢できずに射精してしまった。

びゅん
びゅん

薄暗い照明の下で、マシユはベッドに横たわ彼女の呼吸はまだ乱れ、髪が汗で額に張り付いている。デカチン職員との

「寝取らせ」の行為が終わったばかりだ。

ひびく

「はあ…はあ…」
マシユは小さく息をつき、
シーツを握りしめた。

ひびく
ひびく

しるる

マスターとのぎこちない初めてとは
比べものにならない、圧倒的な肉体的な
充足感…♡

その姿を見ながら精液をお漏らしする…
情けない俺…

そしてマシユは職員から提案される
マスターは寝取られマゾだからもっと
喜ぶ方法があると、
一ヶ月の射精禁止、もちろんマシユとの
セックスは禁止、しつこい
その間に職員とは彼氏と彼女の
関係になるという契約…

俺とマシユはそれを了承してしまった…



カルデアの自室、俺は冷や汗を流しながら
ベッドに座っていた。

下半身には、職員の提案で装着された
貞操帯が重くのしかかる。

一ヶ月間の射精禁止、マシユとの

セックスも禁止、そしてマシユは彼と

「彼氏彼女」の関係になる——あの夜、

彼の言葉に押され、寝取られマゾの
気質を暴かれた俺は、半ば自棄になって
この提案を受け入れた。

「先輩、大丈夫ですか？ 顔、赤いですよ？」

むいっ

はあっ

むいっ

マッシュ・キリエライトが、
いつもの優しい
笑顔で近づいてくる。
だが、その目はどこかいたずらっぽく、
いつもと違う雰囲気があった。
彼女は貞操帯で勃起すらできない俺を
誘惑してくる……

そしてわざとらしく体を寄せてきた。
「ま、マッシュ…ちょっと、近いって……」

俺が慌てて言うのと、マシユはくすくすと笑い、彼女の柔らかいおっぱいが、俺の顔にムニユツと押し付けられる。

「ふふ、先輩、こんなのでドキドキしてるんですか？ 貞操帯つけてて勃起すらできないのに、かわいいですね」

マシユの声は甘く、まるで俺を試すようにさらにおっぱいを押し付けてくる。

貞操帯の中で、勃起しようとするが締め付けられ、鈍い痛みと熱が下半身を支配した。

「うっ…マシユ、やめてくれ…！
こんなの、耐えられない…！」「

俺が情けなく言つと、マシユは「でも、先輩、これが好きなんですよね？」

職員さんが言つてましたよ、

先輩はこういふの我慢するの、

興奮するって」

優しいのに意地悪な口調で続けた。彼女はさらに身を寄せ、耳元で囁く。

「我慢汁、垂れてますよ、先輩。」

貞操帯の隙間から、びしょびしょですね」マシユの指が、貞操帯の縁を軽く撫でる。触れられない下半身がビクビク反応し、

透明な液が滴るのが自分でもわかった。羞恥と快感の狭間で、俺の理性はぐらついていた。

「マシユ…お願いだ、解放してくれ…!!
もう、射精させてくれ…!!」

「先輩、射精したいなら…代償が必要です。
いいですよね？」

むいーい

彼女の言葉に、俺は嫌な予感がした。
「代償って…何だ？」

すあっ

マシユは少し声を低くして、
はつきりと言った。

むいーい

「職員さんと、私…生ハメ中出しセックス
します。先輩の目の前で。それでよければ、
貞操帯、解放してあげますよ」

心臓が止まりそうだった。マシユの口から
そんな言葉が出るなんて、
想像もしてなかった。

でも、貞操帯の締め付けと一ヶ月の禁欲で、
俺の頭はまともな判断ができなかった。

「…わかった。いいよ、やってくれ…」

ただ、早く解放してほしい…」

俺は自分でも信じられない言葉を口にした。

むいっ

むいっ

射精欲に負けて…

最愛の人を…他の男に差し出したのだ…

挿入の瞬間、マシユの声が部屋に響いた。

「あっ…！ や、深い…んんっ！」

彼女の甘い喘ぎ声は、あの夜と同じく、
俺の粗チンでは引き出せないものだった。

リズムに合わせて、マシユの体が揺れ、

ばちゃい

ばちゃい

ん~~~~

ちゅっ

ゆさっ

「ああっ、ああんっ！すごお……！」

と声が切れ切れに漏れる。彼女の目は潤み、
快感に溺れる表情は、俺の心を抉った。

ばちゃい

マシユは「んああっ！だめえっー！」おぢゃい
と絶頂を迎えた。彼もマシユの中で果てた。

おぢゃい

ひゅるるる...

ひゅる... ひゅる...

ひゅ... ゆっ

俺のちいさいおちんちんは
貞操帯の中でビクビク震えていた。
我慢汁が床に滴り、頭は真っ白だった。

ぢゅっ

行為が終わり、マシユは息を整えながら
俺に近づいてきた。彼女の顔は赤く、
余韻に浸っているのがわかった。

ぢゅっ

「先輩…約束、守りましたよ。射精、させてあげます」

俺は安堵しかけたが、マシユの次の言葉で凍りついた。

「でも、今日とは言ってません。もう一ヶ月、待ってくださいね」

彼女の声はどこか冷たく誓いた。

「何ー？マシユ、そんな…!」

俺が叫ぶと、マシユは悲しげに微笑んだ。

「先輩、これが好きなんですよね？」

私、先輩の望むこと、ちゃんとやってあげたいんです。もう少し…

我慢してください

じゃあ、私これから職員さんの

部屋に行ってきますね…」

一人残された俺は、貞操帯の重さと

我慢汁の冷たさに震えた。屈辱と

興奮が混ざり合う。もう一ヶ月、

これが続くのか。

カルデアの医務室、消毒液の匂いが漂う静かな空間。

俺は、射精欲に耐えながら、職員に呼ばれてやってきた。

さらに一ヶ月の射精禁止、というマシユの提案で始まったこの状況に、俺の心は屈辱と興奮でぐちゃぐちゃだった。

彼ははニヤリと笑い、医務室の奥にあるカーテンで仕切られたスペースに俺を案内した。

椅子に座らされ、

「ちよつと待ってて」

とだけ言っていて、彼はカーテンの向こうに消えた。

俺が不審に思っていると、

カーテンの隙間から微かな声が聞こえてきた。聞き覚えのある、柔らかい声——マシユだ。

「職員さん…」と、医務室ですけど…
本当に大丈夫ですか？」

マシユの声は少し緊張しているが、
どこか甘えるような響きがあった。
俺は息を止め、カーテン越しに覗いた。
そこには、マシユ・キリエライトが

彼と抱き合っていた。

マスターが見ているなんて、

彼女は知らない。

「大丈夫だよ、マシユ。誰も来ないって」
彼が低く笑い、ズボンを下ろす。

現れたデカチンに、マシユが

「…っ」と小さく息を飲むのが見えた。

俺の粗チンとは比べものにならない
サイズだ。

マシユは一瞬躊躇したように見えたが、
ゆっくり膝をつき、デカチンを見上げた。

「職員さん……どうですか？」
彼女の声は恥ずかしそうだが、
どこか従順で、まるで彼氏に甘える
恋人のようだった。
「はい。」

マシユの細い指が
デカチンに触れ、ゆづりぐりと唇を近づける。
濃厚なラブフェラが始まった。

「ん……ちゅっ……んん……」
マシユの唇がデカチンの先端を包み、
舌が這う音がカーテン越しに響く。
彼女は時折、彼を見上げて
「ん……気持ちいいですか……？」

と媚びるように囁く。
その瞳は潤んでいて、
まるで彼に心まで捧げているかの
ようだった。俺の胸が締め付けられ、
貞操帯の中で下半身がビクビク震えた。
我慢汁が溢れ、パンツの内側が
濡れるのがわかった。

「ちゅっ……」

ちゅぽっ

にゅぽっ

にゅぽっ

「マシユ、うまいよ…ほんと、いい子だね」
彼が満足げにマシユの頭を撫でると、
彼女は「んっ…嬉しい…」と小さく笑った。
フェラが終わると、服を全て
マシユは脱ぎ…

「職員さん…優しく、してくださいね…」
マシユの声は甘く、しがじどい
切なげだった。挿入の瞬間、
彼女の体がビクンと跳ね、声が
医務室に響いた。

ちゅぽっ

「あっ…!! んんっ、深い…!!」

リズムに合わせて、彼女の体が揺れ、
マシユは気持ちよさそうな声を上げる。

「マシユ、気持ちいいだろ?」

もっと声出していいよ

「んああっ!! だめっ、声…出ちゃう…!!」

ベッドがきしむ音が響く。

びくっ

俺はただ見てんかいることしかできず、

我慢汁が滴り落ち、ズボンに染みが広がる。

射精したいという欲が頭を支配するが、
金属の拘束がそれを許さない。

ギシ..

マッシュが

「やつ…職員さんっ、んんっ！」と

絶頂に達し、彼も低く唸って果てた。

彼女はベッドにぐったりと沈み、

余韻に浸るようだった…

いん

マッシュが服を整え、職員に名残惜しくキスを

して…

医務室を出ていく…。

いん いん

いん いん

ギシ..

いん

いん

いん

いん いん

いん

「マシユ…なんで…こんな…」
俺の眩きは、誰にも届かなかった。

彼女は俺が見ていたことを知らない。

職員はカーテンを開け、ニヤリと笑って
言った。

「いいもの見せたる？射精解禁日は
もつといいの見せてやるから
楽しみにしなよ」

クソ…クソ…悔しい…
だが興奮が止まらなかった…

カルデアの自室、時計の針が夜を告げる、
ついに射精禁止期間が解禁された日だ。

マッシュが部屋に入ってきた瞬間

俺の心臓は期待と不安でバクバクした。

彼女はいつもの優しい笑顔ではなく、
どこか冷めた表情を浮かべていた。

「先輩…お待たせしました。今日、

解禁日ですよね。

久しぶりに…セックス、してあげます」

マッシュの声は柔らかかったが、

どこか機械的で、俺の胸に違和感が走った

彼女が手に持っていたのは、シリコン製のオナホールだった。

「え、マシユ…それ、なに…?」

俺が動揺して尋ねると、マシユは笑いながら答えた。

ドキドキ…

「先輩の相手は、これです、おちんちん

小さいから私が直接するのは…ちょっと、でも先輩の好み、わかつちやいましたから」

マシユに全裸にさせられ貞操帯で

締め付けられていた粗チンが久しぶりに解放される、すでに半勃起状態だった。

ふふ、先輩のおちんちん前より
小さくなっているませんか…？
マシユが冷たく笑い、
おちんちんにオナホールを挿入させ、
ゆっくり動かし始めた瞬間、強烈な快感が
全身を貫いた。

「うっ…あっ…んあ…！」

二ヶ月ぶりの刺激に、情けなく喘がされ、
声が漏れる…。
俺の見栄を一瞬で崩壊させた。

ぐちゃ

ビクッ

ぐちゃ
ビクッ

マシユはベッドの端に座り、
俺を見下ろす。その紫がかった瞳は、
まるで実験動物を観察するように
冷たかった。

「先輩、そんな声…恥ずかしいですよ、
もつと我慢しないと、もう2度と私と
セックス出来ませんよ」

彼女の言葉が胸に刺さる。

なのに、俺の体は快感に逆らえず、
腰が勝手に動いてしまう。

オナホールのリズムカルな動きに、
すでに我慢汁が溢れ、ぐちゅぐちゅと
卑猥な音が部屋に響いた。

「先輩、せっかくの解禁日ですから
特別なもの、見せてあげます」

ビクッ

ビクッ

マシユが冷たく微笑み、部屋のモニターを
オンにした。画面に映ったのは、

ちゃ〜♡

マシユと職員のセックス動画だった。

彼女が「デモンジャラスビースト」の
エロい衣装——紫の露出度の高い
コスチュームに身を包み、彼と絡み合う姿。

「マシユ……これは……うう……!」

俺が叫ぶが、マシユは無視して
オナホールを動かし続ける。

画面の中で、マシユは彼と向き合っ
媚びるように見つめていた。

ちゃ〜♡

「職員さん…大好きです…んっ、ちゅ…」

彼女の唇が彼の唇に重なり、
濃厚なディープキスが始まる。

舌が絡む音がスピーカーから響き、
マシユの甘い吐息が俺の心を抉った。

彼女の目は潤み、まるで彼だけが
世界にいるかのように見えた。

キスが終わると、マシユは膝をつき、
彼のデカチンを愛おしそうに撫でた。

「こんなに大きくなつて…私、嬉しい…」
彼女が胸を寄せ、パイズリパイズリを始める。
柔らかいおっぱいがデカチンデカチンを包み込み、
ゆっくり上下に動く。彼が
「マシユのデカパイ最高だよ」と唸ると
彼女は「ん…もっと、気持ちよくして
あげますね…」と囁いた。
俺の粗チンでは絶対に耐えられない
ご奉仕だ。

ううああ…♡
マシユのおっぱいがムニユムニユと
デカチンを扱く姿は妖艶で我慢できずに
射精した…



あっ、もう出たんですね…

二ヶ月ぶりの射精は気持ちいいですが、
まだ始まったばかりですよ…

「うめ…ムシユ…♡」

どんどん、先輩にとつての「抜き所」がめんどくさい
と思いますよ♡

ムシユ

ムシユ

ムシユ

デカチンが完全勃起すると、マシユは
彼の上に跨がり、騎乗位で挿入した。
「あっ……！んんっ……大好き、職員さん……♡」

ばちゅんっ

彼女の喘ぎ声は、まるで交尾のような
野性的な響きを帯びていた。
腰を激しく振り、

ばちゅんっ

「あっ、あんっ！や、すっ……好き、好きっ！」
と叫ぶマシユ。
彼女の体が揺れ、髪が乱れ、
快感に溺れる表情は、
俺が見たことのないほど淫らだった。

画面のマシユは彼に「大好き、ずっと一緒に……!」とラブラブな言葉を重ね、絶頂を迎えた。

彼も彼女の中で果て、二人とも余韻に、浸るやうに抱き合った。

ばちゅん

いん

どろ

その姿を見た瞬間、俺はまたすぐにオナホールの中で我慢できず、連続で射精してしまった。「うっ……ああっ、んああ……!」

情けない声が部屋に響き、快感と屈辱が混ざり合う。だが、マシユの手は止まらない。冷たい目で俺を見ながら、オナホールをさらに激しく扱き続ける。

「先輩、またイったんですね、本当に、寝取られ好きなんです」

彼女の声には、どこか軽蔑と哀れみが混じっていた。

動画がループ再生され、マシユの「大好き、職員さん…」が何度も響く。俺は射精を繰り返して、頭が真っ白になるまで射精した。マシユは無言でオナホールを動かし続け、俺の情けない姿をただ見つめていた。

行為が終わり、マシユはオナホールを片付け、モニターをオフにした。

俺はベッドに崩れ落ち、息を切らしていた。彼女は冷たく言った。

「先輩、楽しかったですよね？
もっと気持ちよくなりたいですか？」

その言葉に、俺は震えた。

マシユの冷たい目は、
俺の寝取られマゾの欲望を
見透かしているようだった。

そして…

次の射精管理のとおる日…

俺は目を疑っていた
目の前には、全裸のマッシュが立っている。
彼女の白い肌が照明に映え、

紫がかった髪が柔らかく揺れる。
だが、肝心な部分――

おっぱいや下半身にはまるで
モザイクのような光のフィルターが
かかり、ぼやけて見えない。

71

「先輩…どうしたんですか？
私の裸…いかがでしょう？」

マシユがどこか楽しげに言う。
彼女は胸を隠そうともせず、

堂々と立っている。その自然体な姿が、
俺の心臓をバクバクさせた。

フム...♡

「マシユ、な、なんで見えないんだよ、
これ!？」

俺が慌てて叫ぶと、
背後から軽やかな笑い声が響いた。

「ふふふ、マスターくん、いい反応だね
私の最新魔術実験の成果さー！」
ダヴィンチが説明を始めた。

「マスターくんの魔術回路にちよっと
細工させてもらったよ

『粗チン補正フィルター』って
呼んでるんだけどね、要するに、
君の…その、小さいおちんちんの
サイズに比例して、魅力的な部分が
見えなくなる仕組みさ、マシユの
美しいおっぱいやあそこ、残念ながら
君にはフィルターがかかるように
なったのさ。

ダヴィンチの言葉に、俺は動揺した。

私もマシユに頼まれた時は
戸惑ったけどこういうプレイなんだって？
愛の形は自由だね…
じゃあ、私はこれで…

マシユと二人きりになった実験室。
彼女はまだ全裸で、フィルターのせいで
おっぱいや下半身は光のモザイクに
覆われている。俺は目を逸らそうとしたが、
マシユが一步近づいてきた。
「先輩…私の体、
ちゃんと見えませんですか？
ふふふがわいそうですね」

彼女の声は優しいのに、
どこか意地悪な響きがあった。

マシユはわざと胸を突き出すように
ポーズをとり、モザイクが揺れる。

「先輩の…その、

小さいおちんちんのせいで、クスクス…」

「だって、先輩、粗チンだからですよね？
私、ちゃんと見せてあげてるのに、
モザイクがかつちゃうなんて…
情けないです…」
マシユが手を腰に当て、モザイクの
部分を強調するように体をくねらせる。

彼女の冷たい視線とからかいが、
俺の羞恥心を煽る。ズボンの中で、
粗チンから我慢汁が滲み始めた。

「ふふ、先輩、興奮してるんですか？
見えないのに、こんな反応…本当に、
マゾなんですね」

マシユが近づき、俺の耳元で囁く。
彼女の吐息が首に当たり、彼女の香りに、
頭がクラクラした。

フム…♡

「マシユ…やめてくれ…」

「こんなの、耐えられない…」

俺が喘ぐように言つと、

マシユは一瞬、目を細めた。

「先輩、こうやってからかわれるの、
嫌いじゃないですよね？」
わかつちやいましたから」

彼女の言葉は、まるで俺の心を

見透かしているようだった。

マシユは冷たく微笑み、
俺は膝を震わせ、ズボンに染みが
広がるのを感じた。

触れられない、射精できない、
見れない、それが、俺の寝取られマゾの
欲望をさらに煽った……









































